



105号
2005/7/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」

東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://users.hoops.ne.jp/wanli-jp/>

Eメール:wanli@m2.ocv.ne.jp

ホームページは毎月5日頃までに更新を務めています。



「猿と少年」 畠 博之

撮影地は、ネパール、西部丘陵地のゴルカ郡です。撮影時期は1990年代初めの乾季で暑い季節。少年は私の生徒(小学生)で、お父さんが森にいたはぐれの子猿を捕まえた。

畠 博之：1987年～1998年にわたりネパールの山村において教育協力活動に従事、帰国後ネパール関係のNGOで活動を続ける。

<http://www.page.sannet.ne.jp/t-hata/>
(「わんりい」HPに新しくリンクします。アドレス上をクリック)

「わんりい」105号の主な目次

中国紹介②〈中国民俗—改革解放後の変化1〉	……2
台湾で日帰り登山(阿里山編)	……4
「太郎の子ども図書館」作りたいII	……6
松本杏花さんの俳句	……7
中国を読む②【謝々!チャイニーズ】	……7
ピースボート105日間の旅V	……9
北京からこんにちわ!①	……9
アフリカとの出会いII	……10
活動報告「ケニア料理」	……11
何媛媛来信⑩「婚姻にまつわる民俗3」	……12
わんりい掲示板	……12

♪♪ 笑顔が美しくなる ♪♪

「中国語で歌おう会」 会員募集中!

明るく楽しい中国人歌手・趙鳳英さんと歌いましょう!



7月の講座 7月15日(金) 19:00～20:45
麻生市民館・視聴覚室(新百合ヶ丘駅下車北口3分)

- 7月の練習曲「常回家看看」
中国では有名な曲で映画や普通の番組や正月番組もよく出た歌です(趙鳳英)
- 8月の予定：8月19日(金)「我が太陽」
イタリア民謡でよく知られた「オオ ソレ ミヨ」を中国語で気持ちよく歌いましょう!
- 9月の予定：9月16日(金)7月8月の復習
- 指導：趙鳳英さん(中国四川省出身歌手)
体験参加(1500円) 歓迎します。ご自由にご参加ください!! 尚、ご参加される方は録音機をお持ちください。 問合せは、「わんりい」事務局へどうぞ

「わんりい」中国語勉強会、こんな活動しています!

「わんりい」の活動のきっかけになったのは「わんりい」中国語勉強会ですが、今、メンバーの有志がそれぞれ何冊かの絵本を持ち帰り、中国語に翻訳しています。

今月号の、安井清子さんの文章でも紹介されていますが、烏里烏沙氏を理事長とするNPO法人チベット高原初等教育・建設基金による小学校が、昨年9月に開校。図書室もあることから、現地に滞在し、建設に直接関わった鈴木晋作さんから絵本が欲しいとお話を伺いました。エイズに罹った子女への支援で絵本を贈っているラリグラスの岩田温子さんの元に複数集まった絵本を頂き活動が始まりました。

私たちの頼りない中国語をサポートくださっているのは、講座講師の郁唯先生。ごそやご面倒かと思いますが、授業外で丁寧に校正くださいます。翻訳した絵本も10冊を超えます。学んでも実際に使うことの少ない中国語ですが、絵本の文章を中国語でどんな表現にしようかとあれこれ悩むのも楽しみの一つですし、学んだ中国語を生かせる喜びもあります。

これからも続けようと、意気軒昂なメンバーもいます。不要になった、あまり難しくない、楽しい絵本がありましたら、おついでの折ご寄贈頂ければ有難く存じます。(田井)

■ 「わんりい」の催しのお問合せとお申込みは TEL & FAX 042-734-5100 「わんりい」

【中国紹介 《21》】 〈中国民俗—改革解放後の変化1〉

轡田 美弥子

中国といえば、最近は「おしゃれ上海」と銘打った数日間の安いツアーも増えてきたようですが、一般人にとってはまだまだ「近くて遠い国」のようです。

2000年くらい前から日本は中国または朝鮮半島経由で物質的にも文化的にも輸入してきたものから成り立っているようです。人間的にも祖先は中国系朝鮮系を合わせればかなりの割合を占めるようです。互いに顔だけ見てもどこの人かわからない、といったような感覚をもち、箸を使って米を中心に野菜類を食べ孔子の教えにのっとり礼儀を重んじてきた、漢字を使うなど歴史的観点からみれば中国の影響は大きなものがあります。

ところが近現代以降、中国＝長兄、朝鮮半島＝次兄、日本＝弟に近い関係は逆転してしまったようで、植民地支配や戦争仕掛などでどうもぎくしゃくしている状態が長く続いているようです。地球全体からみれば大したことではないかもしれませんが、東アジアの関係からいえば重大な問題のように思えます。これら国々だけでなく、東南アジアなど漢字文化圏を含む広い範囲に影響があるからです。将来アジア対欧米という勢力均衡図式になるかは知りませんが、せめてアジア系は仲良くしておきたいものです。

最近、中国の急成長ぶりが経済面を中心にマスコミで紹介される機会が増えるようになりましたが、さらに庶民レベルでの変化ぶりを紹介したいと思います。改革開放といわれた80年代後半より、天安門事件を経て北京オリンピックを成功させようとする中国の変化ぶりには本当に驚かされます。一体どこが社会主義なのかと疑問を感じるどころ大になっています。それと比較すると、逆に日本のどこが資本主義なのかと思います。年月がたってもあまり変わらない日本に対し、中国はしばらく行かないと浦島太郎に近い状態に陥ります。つまり、あのときあったあの何かがどう変わってしまっているかわからなくなります。建物は消え、交通網は変わり、手続きなども変わっているの、いちいち聞いていかないと何がどうなっているかが把握できなくなります。

以前は着ている服装や髪型、持ち物から中国人か日本人かは判別しやすかったのですが、最近髪の色、化粧、髪型、服装、持ち物(ブランド系など)、動作からは推測するのが難しくなりました。経済発展で余裕が出てきたのか、外見からはあまり見分けがつかません。強いていえば、派手なのが中国人、地味めなのが日本人といったくらいです。動作も、我先に他人を押しよけ他人に冷たいのが中国人でしたが、今では彼らも順番待ちをし、他人にも親切に教え、見知らぬ人にたずねたりすることが珍しくなくなりました。店員はしつこいくらいに商品の説明をし勧めてきます。こうして、両国人は外見だけではなく、行動までもが見分けがつきにくくなりました。

こういったことから個別にその成長ぶりを思い返していくと、結構あるものです。それらを紹介してみたいと思います。

◆ 厠所(トイレ)

旧: 日本人が中国行きをためらう最大の理由? である。“各家にはトイレがなく、共同トイレに行くかおまるを使うかの選択しかない。共同トイレには個室のしきりがなく、すべてが丸見えでとても日本人は耐えられない。”という話を聞くと、大体不快感を催す。実際はというと、都会の共同住宅には家にトイレがある。しゃがむ方式が多かったので日本と同じだ。高層階の共同社宅はもちろん水洗である。ただ観光地や食事場所なども以前は仕切りのないトイレが多かったことは確かだ。日本だって大して変わらない。わたしが小学校に入学したときは、某大都市だったが学校のトイレは半水洗だった。半水洗とはわたしが勝手につけたのだが、何かというと各個室があり便器はあるが底は前後(左右)とつながっていた。そして一定の時間がたてば、ある方向から勢いよく水が流れてきて後ろから次々に排出されていくというトイレだった。自分で流す必要はない。汲み取り式ではないが、でも水洗だ。こんなトイレも1年で消え、普通の個別水洗にかわった。ところが中国に行くと、まだそんなトイレがあったりして懐かしく感じたものだ。時間が長ければ臭くてたまらないが、短ければ水洗トイレと大差ない。中国でも半水洗に近いトイレがある。かなり田舎の場合、洗面、シャワー、トイレは同じ一つの穴に排泄されるようになっていることがあり、後始末はホースを使って自分で流す。シャワー途中で穴に必要なものを落とさないよう、気をつけながら髪を洗ったものだ。

わたしは元来トイレ恐怖症だ。とにかくトイレに行くのがいやなので、極力水分を控える。中国で初めて入ったホテル以外での衝撃トイレは、北京の故宮だった。個室になっているのだが、そのドアは中途半端で、立っていると姿が見えるが座れば下半身は隠れる。いくら下半身が隠れるといっても上半身は見えるので、それに慣れず、しゃがむまでかなりた



貴州省東南部の山間部の苗族の村。川に沿った幹線道路沿いに住居があり、川の近くに木製公衆トイレがある。すべて個室仕様になっているがドアを開けると暗いので閉めることは少ないだろう。ただ単に固まっているだけで配置はばらばら、男女の区別や、どの家庭がどこを使うかは決まっていないようだ。あまりに寒くて入ってみた。高床式だからか、においはない。風通しがよすぎるからだろうか。



貴州省中西部の漢族の村。観光地化されているせいか、食堂なども普通の水洗トイレ。山奥かそうでないかの違いで、平地であればどこでもそう変わりはない。

めらった。こんなトイレに行くくらいなら我慢したほうがいい。そう思ったものだ。その後、さらに衝撃的なトイレを見ることになる。動物園のトイレは、その性格上？ もちろん仕切りはなく穴だけの非水洗。万里の長城では、仕切りは横(左右)だけでしかも非水洗で便器内はほとんどいっぱいだった。ホテルは水洗だし問題はないが、外に行けばこんながあるので極力トイレに行かないようにしていた。ちなみにこれらは15年ほど前の話である。

中国ではしゃがむとき、敵に後ろを見せないようにする。仕切りがなく便器の向きが前後の場合は外で待っている人と対面することになる。日本の場合は逆だから、仕切りのないところで白い尻を見せていると中国人が逆に驚いている。便器の穴が日本とは逆になっているので、それに合わせればおのずとわかると思うが、習慣とは恐ろしいものだ。向きが左右の場合は、気にする必要はない。

わたしは幸いこういったトイレが多かった時代には、日本人の集団行動に入っていなかったので恥ずかしい思いをしなくてすんだ。中国人は当たり前だから、平気な顔で用をたし、待っている。ところが日本人はまず恥ずかしいが先にくるので、日本人同士で行くと互いにやりにくい。中国人と一緒にあれば変に気負う必要がないので、ある意味気楽だ。中は大体薄暗いのでよく見えないし、非水洗だと長居したくないのでさっさと出る。中国が初めての人はまずいやな気分になるだろうが、自然の摂理だから仕方ない。いくら文句を言っても結局は慣れるしかない。こういう中国のトイレでも礼儀がある。終わったら便器から離れて身支度は外ですということだ。個室主義に慣れてしまうと、身支度までまたがったまましてしまうがそれは待っている人に失礼だ。中には終わって立ち上がったのを見るとさっさと踏みこんでくる人もいる。逆に社交場になっている共同トイレでは待っているにもかかわらず楽しくおしゃべりしながらしゃがんでいることもある。

田舎に行けば、事情は異なるのは日本も同じだ。シルクロードでは完全に野外でするしかない。山村の場合は家の外にある小さな小屋に設置していることが多い。もちろん水洗ではない。

余談だが、中国では排泄の習慣が日本とは違う。子供の場合はどこでも許されるらしく以前は公共の場所でも平気だった。ズボンの前後が割れていて、座ればすぐに排泄できるような服を着ている子供が多かったが、最近は衛生上からも禁止されることが多くなり、経済的に豊かになった人々は子供にも我慢させるようになった。

新: この10年間でトイレ事情は飛躍的に向上した。ドアつき、水洗、紙の設置などが当たり前のようになってきた。ドアが壊れていたり洋式便器が汚くて座れなかったりすることはあるが、昔に比べればかなりよくなった。中には手を洗ったあとタオルを渡してくれるおばさんがいたり、香水つきの紙を手渡してくれるホテルやレストランがある。

トイレに行ったら手を洗うとか、紙を使うといった衛生観念も浸透してきた。日本よりも多いのが手の乾燥器。手をかざすだけで温風が出てくるのだが、この設置率はおそらく日本より高いのではないか。南方は湿気が多いせいか、それとも経済的に豊かなせいか、水洗率は非常に高く環境もよい。使用者たちも清潔かどうかを気にするようになり、どこでも排泄するような光景は目にしなくなってきた。以前の社宅のアパートは少なくなり、高層の分譲マンションが増えているが、そういうところでは洋式の水洗は当然のようである。街中には公衆トイレもあるが、有料の場合でも紙をくれることが多くなった。高速道路の休憩所でも個室は当然で、床は大理石っぽい。レストランに行っても個室でないものはまずない。だから日本人が過剰に心配する必要はなくなっている。本当に人里離れた奥地にでも行かない限りは、トイレの心配はあまり必要ないだろう。わたしもこんもり状態以外であれば、我慢するまでもなくなった。

いろいろな中国のトイレを見て思ったのだが、扉があるかどうかは必ずしも重大ではないように思える。なぜかというと、扉があっても鍵がかからない場合の恐怖はもう体験したくない。いつ扉を開けられるかびくびくしながらでは落ち着かない。それならばいっそないほうが、先客の存在確認は容易だ。以前、観音開きの鍵なしトイレに入っていたら、子供に開けられてびっくりしたことがありそれからは密室にこだわらなくなった。しかし中国人もノックせずに開ける人は減り、存在確認してから入るようになってきたのでそういう意味でもトイレでの心配はあまりない。

トイレ論は始めるときりがないが、日本人が耐えられないトイレは今は少ない。ある知人は初めて行った中国(北京、ツアー)で一度も仕切りなしトイレに出くわさなかったそうだ。有名観光地は設備を一新したのだろう。場所によっては赤外線による自動水洗もあるし、手洗いは日本メーカーがかなり浸透し自動水洗が多い。聞いて面白いトイレがなくなりつつあるのは、ある意味残念でもあるくらいだ。

(写真は本文とは直接関係ありません)

▶ 阿里山と森林鉄道

今から250年以前、ツォウ族の酋長・阿巴里が発見し、以後多くの獲物を部落にもたらしたため、彼の名にちなんで阿里山と名付けられた(中華民国交通部観光局のホームページより)。

阿里山森林鉄道は鉄道愛好家の間ではかなり有名らしいが、私はほとんど知らなかった。旅行前に調べたところ、日本統治時代に日本資本が森林資源(ベニヒノキなど)を搬出するため台湾各地に森林鉄道を敷設した。しかし林業の衰退とともにほとんど廃線になったが、阿里山鉄道のみ観光用として復活、現在に至っている。3重ループや、スイッチバックなど旅人が喜ぶ、道具立てはそろっている。料金は399元。我々が乗ったのは13:30発であった。

森林鉄道は、嘉義駅(海拔30m)から71.9km、阿里山駅(海拔2274m)まで登る。その日の乗車率は、ほぼ100パーセントで、すべて観光客。5月の連休中ゆえ半分ぐらいが日本人だった。熱帯から温帯までの植物の垂直分布が見られるというのだが、ぼーっと景色を見たり駅弁を食べたりしている間に、5時頃阿里山駅に到着、涼しい。ホームは板張り、地震で壊れたあとに作った仮設駅である。

改札を出るときに「阿里山国家森林遊楽区環境美化及清潔維持費」という長い名目の入場券を徴収された(150元)。改札を出ると、「…賓館」や「…大飯店」の出迎えの車で狭い路上がにぎわっていた。駅前の広場に土産物屋が何軒かあるほかは、木立の中に小規模の「賓館」が点在している静かな保養地である。我々も「阿里山賓館」の送迎バスに乗り今宵の宿に向かった。

阿里山という単独の山はなく、地名である。また、山脈名に「阿里山山脈」があり、こちらは台湾最高峰の玉山を主峰とする玉山山脈の西に派生する枝脈の名前だ。烏龍茶で「阿里山高山茶」というのは、この一帯の標高1000m以上の茶畑で産するものを云うそうだ。

夕食はホテルで摂った。ホテルの食堂は、2方がガラス窓で外景に面しており、明く見晴らしも良い。ちょうど、山



「阿里山賓館」付近からの大塔山(2663m)

かげが黄昏に溶けこんでいく時間帯であった。テーブルに置かれた花瓶に一輪の花、「夜来香」だと邱さんが云う。歌の名前で名高い花はこれかと、見直す。クチナシに似た上品な香りだ。窓の外が闇になり、夜来香が引き立った。

5月3日、早起きしてご来光を見るための列車に眠気をこらえて乗り込んだ。4:30頃出発し、「祝山駅」まで行った。ここは日の出と雲海がすばらしいとの前宣伝だったが、あいにく雲が立ちこめて、日の出はなかった。それでも宣伝の効果があり、大勢の人が押しかけ見晴台はにぎわった。

▶ 鉄道線路に沿って

列車にてホテルに戻り、朝食を済ませる。そのあと今日の本題である「ハイキング」に出かけた。観光地である阿里山での山歩きは、あまり期待していなかった。ホテルから近い、森林内の遊歩道を歩くものと思っていたが、夕食のときにガイドの邱さんが「人のあまり行かない道がありますが、どうしますか」と水を向けてくれたので、そちらに行くことにした。台中大地震(1999年)で崩れた支線の森林鉄道がある方向なので、復旧工事の関係で、通れないかもしれないが…という注釈付であった。

9:00出発。ホテルを出て坂道を上り、10分ほどで阿里山駅より一つ先にある「平沼駅」に着く。構内にある小さな土産物屋で烏龍茶煮の茹で卵を買う。そこからは道路を離れ、線路の中を歩いた。線路内を歩くのは一般的に禁忌であるが、阿里山駅から先は、早朝の「看日火車(日の出号とでも云うべきか)」のほかは終日列車の運行がないので、危なげなく歩ける。本当は禁止されているようだが…。全く往来がないわけではなく、エンジンを付けた作業用のトロッコのようなものが、作業員を3人ほど乗せて行き来した。遠くで音がすると、線路から退去してやり過ごす。

なおも線路を歩く。まわりはヒノキの林で、暗い。路床の砂利が半ば埋もれているので、歩きやすい。枕木も気にならない。たまに明るい草原があると、ジキタリスの花が咲いていた。原産地はヨーロッパとのことなので、どうしてここに? 線路に平行して「正しい歩道」もある。しかし、そちらは地形を忠実に反映し、上下の坂があるので疲れる。わ



阿里山登山列車、これは帰路の「看日火車」。往路の時は外は真っ暗

れわれ軟弱登山隊にとって、平らで楽な線路内歩行は麻薬のようなもので、ふんざりよく離れられない。

とうとう楽な線路内を離れる。「正しい歩道」は線路と分かれて右に折れると、急な階段で木立の中を登っている。木枠で作った階段が続く山道に入った。おんな衆は台北の陽明山のときのように鳩首して、草花の吟味を繰り返すので、歩調は夜店歩きと変わらない。

どこまでも、木枠で小道を保護をした「遊歩道」である。あまり利用されないようで、へのり摩滅はない。危険箇所もない、安全第一の道である。巨大なヒノキの切り株がときおり現れる単調な山道だ。9時半ごろ小休止。持参のマンガーなどを食べる。

高度が上がると、ネマガリダケのような笹が茂っているところもあり、時期なのでタケノコもあった。一つ折って試食すると、えぐみがある。タケノコ取りの地元の人もいた。

▶ 思いがけずのぼれた大塔山

私は、事前に受けた邱さんの口ぶりから、適当なところで引き返すのであろうと思っていた。どこで引き返すかと思いつつなおも進むと、いつしかヒノキはまばらになり、空がひらけて、尾根の肩に付けられた道に行くようになった。雲は多いが、青空ものぞくまああまの天気だ。樹木が途切れて視界が得られると、左手下に樹海が広がり、その中に阿里山のホテル群や付随建物が白く散らばっている。かなりの高みで、昨夜ホテルの食堂から見上げた、岩山の一角にいるのが判った。やがて、行く手に魁偉な岩峰が立ちふさがった。今までは、楽で安全な遊歩道であったが、この先どうなるのであろうと、興味と不安を少々まじえて進む。

しかし危険な箇所もなく、あっけなく岩峰の基部まで来てしまった。咲き残りのシャクナゲが現れた。行く手の道はうまく岩壁を回り込むようになっており、難しいところもなく山頂まで行けそうだ。邱さんは弾んだ声で、実はここまで来たことはない打ち明けた。以前に客と来たときはもっと手前で引き返したという。彼女は山頂を前にしてガイドの仮面は消え、嬉しそうな登山者の表情となった。仕事で遊べるのはうらやましい。

山頂直下まで来ると、コンクリート製建物があつた。その脇を通り、裏手にある階段を登ると山頂だった。12:30到着。そこは、岩の間に檜を組み、板張りの床と手摺りを巡らした見晴台になっていた。まあ、屋根の上の物干し場といったおもむきである。構造はしっかりとしており、安心して崖下をのぞき込むことができる。見晴台の4辺を順々に巡り、眺望を堪能した。雲が多いのであまり遠望はきかないが、今いる尾根の先には、けんのんな岩山が徐々に高度を下げて連なり、「異境」の雰囲気満々だ。山頂の標識は何もなく、ここは何という山？ 高さは？

景色に観とれていると、トレーナー姿の50歳代と思われる男性が現れた。彼はいつの間にか邱さんと話している。男性の現れるところを観ていないので、突然登場という感じであった。邱さんの説明によると、彼は揚さんといひ、山頂下のコンクリート建物に住んでいるという。ホームレスではなく、電波関係の仕事(よく理解できなかったが対



大塔山、高度感あふれる山頂付近の岩。左が揚さん

大陸のため?) をしており、れっきとした公務員。近々新しい施設に引越すそうで、今ある施設は閉鎖されるそうだ。最盛期には8人が詰めていたという。

揚さんは、見えている岩尾根づたいに、「次のピークまで案内する」と親切に誘ってくれたが、その方面は観るからに恐ろしい山容なので、丁重に辞退。格下げ代案として隣の岩コブまで案内してもらうことになり、軟弱登山隊は次善の案でほっとした。隣の岩コブでも十分に怖く、心臓に悪い。どう怖いかというと、まず掴まるものがない。目的の岩コブは、ヤカンの表面のようにのっぺらぼうで、端は放物線を描いて虚空に落ちている。つまり角が大きなアールになっていて、その先はのぞき込まないと見えない。ヒッチコック映画で、主人公が片手でぶら下がる場面がよくあるが、のっぺらぼうの岩で気の利いたロープや、岩角はない。バランスを崩してプロペラのように手を回す自分を想像すると、足もとがすくむ。

台中大地震のあとで日本人がここに来たのは、初めてだと揚さんは云つた。この山は「大塔山(2663m)」といひ(付近に別の塔山がありこちらは、小塔山と呼ばれている)、阿里山山脈の最高峰であることをあとで知つた。台湾には、五大山脈というのがあつて、阿里山山脈もその一つである。

このあと、揚さんがラーメンをごちそうしてくれることになり、彼の住居兼職場のコンクリート建物を訪問。入り口そばの小さい部屋を左右にやり過すと、奥に15畳くらいの大部屋があり、そこを本拠地にしていて。テーブルと、椅子が数脚、コンクリート床に広げた寝袋が一つ、水の入ったペットボトルなど。有り体に云つてかなり殺風景である。登山用コンロでお湯を沸かし、ちょっと辛口の台湾製カップ麺を皆で頂戴した。水は天水を用いていた。

復路は足取りも軽く下山。2時過ぎにはふもとの降りてしまった。「阿里山遊歩道」がホテルの方向なのでついでに見学。遊歩道内には巨大なヒノキの切り株が幾つもあり、日本人が来る前は、巨木の美林であつたらうと思つた。

ホテルに戻るとすぐ、雷鳴がとどろき、いなびかりもまじえた土砂降りの雨となつた。少し時間がずれたら濡れるところだったが、台湾滞在中は一度も雨に濡れなかつた。

(完)

◆再び、ゲオバトゥ村を訪ねました

9月、ゲオバトゥ村……「太郎の図書館」(仮称です)を建てる予定にしている村を再び訪ねました。でも、今回は、ちょっと寄り道してから、村にたどり着いたのです。ちょっとというには、あんまりにも遠回りでしたが、東チベット(中国・四川省の西側のチベット地域)経由でゲオバトゥ村へ行ったのです。ハッハッハ!(と、笑っちゃうほど、遠回りでしたね)

今回の私の旅は、

日本→ラオス・ビエンチャン→**空路**→雲南省・昆明→**列車**20時間→四川省・成都→**バス**9時間→康定→**車**7時間→理塘→**車**5時間→曲登郷→**トラック**5時間→理塘→**バス**17時間→成都→**空路**→昆明→**バス**13時間→景洪→**バス**5時間→モンラー→**バス**2時間半→モーハン→国境を越えてラオス入り。**トラックバス**2時間→ルアンナムター→**バス**4時間→ウドムサイ→**バス**18時間→ビエンチャン!～～→**空路**→ポンサワン→**バス**4時間→ノンヘート→**トラックバス**30分→ゲオバトゥ村

やれやれ……どうしてこういうことになったかということ……曲登郷というのは、4300メートルの高度にあるチベットの人たちの村です。そこに今年春から何ヵ月もその地に暮らし、地元の人たちと一緒に小学校を、チベットの建築様式で作っている日本人がいます。鈴木晋作さんといいます。昨年暮れ、たまたまラオスで出会いました。話を聞いて、建築は業者に任せてやるものなのだろうと思っていた私には、そうやって地元の人たちの技術を使い、一緒になって建築の仕事をしている人たちがいるなんて、ちょっとした驚きでした。で、写真を見せてもらったりしているうちに、見たこともないようなでっかい空、どこまでも続く草原……行きたくなくなってしまったのです。その小学校を見てみたい。そして、ラオスの図書館建設のことも相談したい、と。

ということで、ちょっと! 寄り道をして、曲登郷に行こうかなあ～、鈴木さんを引っ張ってゲオバトゥ村に行ってもらおうかなあ～と思ったら、行ってしまったのです。ということで、東チベット経由? で行ったのですが、寄り道というには、かなり遠かったです。

◆曲登郷の小学校

高度4300メートルで作業をしているのです。しかも、電気の工具などもない。全部手作業。石積みの堅牢な分厚い壁の校舎が、中庭をぐるりと取り巻くように作られていました。そして、中は、木で壁、床、天井が作られています。

ひとつひとつ石を積み、木を削り……とても丁寧に作られていて、人の手の力と温かさが伝わってくるような気がしました。この曲登郷という村は、けっして小さな村ではなく、結構な数の子どもたちがいるのですが、小学校はつい2年前までなかったそうです。

それが日本人の援助(チベット高原初等教育・建設基金会 理事長: 烏里烏沙氏)で、小さな校舎が作られ、すでに2年生までの子どもたち(大きい青年みたいな1年生もいます)が勉強しています。でも、すでに校舎が足りないの、今回の小学校建築となっているのですが、とってもいいなあ、と思ったのは、子どもたちや先生が、毎日、新しい校舎を作っている人たちの姿を見ていることです。また、作る人たちも、子どもたちが大声で勉強している声を聞きながら作っている。また、村の大人たちが面白いくらいに、学校を覗きにきていました。お年よりやごっついお父さんたちが、マニ車を回しながら、窓から覗き込んで授業参観をしています。村の人々が、こうして、小学校で勉強している子どもたちの姿、そして、今作られつつある新しい校舎を覗きにきているのは、とっても素敵だな……と思いました。それにしても、学校がなかったところに、学校ができるということは、なんと大きなことでしょう。

昼過ぎ、村はずれのお寺の裏に行きました。そこから向こうには、ただ草原が広がっています。見渡す限り草原です。草原の向こうから何かが駆けてきます。点がだんだん大きくなると、それは2人の子どもでした。真っ赤なほっぺたをした男の子と、小さな女の子が笑いながら走ってきました。学校へ行くところなのです。私は感動してしまいました。

◆モンの村で、図書館の土地を測量する

9月半ば、ラオス、シェンクワン県のゲオバトゥ村に行った。私たち(鈴木、ソムトン、安井)は、村の人たちが「ここなら使っていいよ」と言ってくれている土地を測量することにした。そこは、村の中心で、人々が日々通る道のわきだ。私たちがいつも泊まらせてもらっているサイガウじいさんの息子、ゾンブーおじさん一家の家が、その土地のすぐ下にあり、ゾンブーおじさんの豚小屋が、その図書館予定敷地内にある。豚ちゃんたちは、じきに引越しをしてくれることになっているが……。

今、村の人たちは、晩成のトウモロコシの収穫に大わらわ。山の畑からかごいっぱい、トウモロコシを背負ってきては、畑と家を何往復もしている。ゾンブーの一家も出払っていて、残っていたのは末息子のメドン(目のぱっちり

した6歳の男子。本当は小学校に今年入る予定だったが、やんちゃでちゃんと座ってられないので、まだ「学校適齢期」とはみなされず、今年は入れなかった)が一人で家にいて、私たちが何やらはじめると、他の子どもたちといっしょに覗きにきた。

まず、土地の四隅に杭を打つ。すぐ下のゾンブーの家の軒下に、薪がいっぱい転がっている。私たちはその薪を拾ってきて、杭代わりに使った。すると、メドンが大きな目を心配そうに大きく見開いてやってきた。「それ、ぼくたちの薪だよ。使わないで」。メドンは小さくても、留守番をしている今、家の全責任を背負っていて、私たちが薪を取ってしまうのではないかと心配しているのだ。思わず笑ってしまったが、「ちょっと借りるだけだから、心配しないでね」と言い、使わせてもらう。

豚小屋と、その隣のただの草がはえている何でもない土地が、黄色のロープに四角く囲われた。子どもたちと、道行く大人も集まってきた。

私は走って絵本を取ってくると、黄色いロープの中に入り、子どもたちを呼んだ。「お話するよ」と。ソムトンさんと鈴木さんが回りで測量の作業をする中、私は子どもたちに絵本を見せてお話をした。

「ねえ、ここに何ができるの?」と男の子が尋ねる。「子ども

たちが本を見たりお話をきく家」と私は答えた。そう答えたたん、その黄色いロープで囲われただけで、まだ何も無い土地に、子ども図書館になる家が見えるような気がした。まだ何も無いのに、そこがもう、「本を見てお話を楽しむ空間」になりはじめているような気がしたのだった。

松本杏花さんの俳句《拈花微笑》より

湧く如く闇の螢の息づかい

shǎn shǎn yíng huǒ chóng
閃閃螢火虫

àn yè fā chū hū xī shēng
暗夜发出呼吸声

yī rú dà cháo yǒng
一如大潮涌

季語：螢火虫，夏。

能听到萤火虫的呼吸声，一是说明万籁俱寂的程度；二是说明作者已与萤火虫息息相通了。在俳句创作中，传统上要尽量削除人工痕迹，做到真正的人与大自然的对话。这时的人，应是大自然的一分子，而不是改造者或对立者。

春潮可在嫩芽的叶脉中奔腾。倘若萤火虫呼吸声象征着夏潮的涌来，那么，这夏潮就是万木葳蕤。

中国を読む②④

「謝々!チャイニーズ」 星野博美 著 情報センター出版局(1996年)



心がわさわさする一冊だ。著者のデビュー作となる本書は、彼女が28歳の夏、中国・東興から上海までの旅を綴ったもの。

著者・星野博美は「自分を壊したくて」旅に出る。それにはやはりアジアに向かうしかない。特に中国は容赦ない。さすが、ありとあらゆる辛酸を舐めても立ち上がるタフな国である。その強靱な国で旅を続ける星野さんは、時には守られ、時には密航の手続きを頼まれ、時には美味しい手料理をご馳走になりながら、生きる力を分けてもらっている。

星野さんに金はない。男もない。あるのはカメラとメモ帳、それから語学力。この三種の神器はすべて将来の投資であり、時に星野さんを不安にさせる。30

歳を目の前に、女性はちょっと弱くなる。収入が低く、結婚の予定もない宙ぶらりんの私は個人的にそう思う。「自分を壊したくて」旅に出た星野さんは、中途半端な妥協を重ねるうちに曖昧になっていく自分を止めたくて飛行機に乗るのだ。同じ台詞を日記に書いた私はそう共感する。

「日本人は幸せです」と、中国人に言われて星野さんはむっとする。実は私も似たことを言われたことがある。日本で働いている中国人から「中国に行けば、自分の境遇を幸せと思うかもしれませんが」とのお言葉を頂いた。自分が幸せだと思っていれば、もっと堂々と厚かましく日本で生きている。そう感じないもどかしさがあるから、何かを求めてどこかへ行きたくなる。そして星野さんは、香港に渡り、そこで暮らし、ノンフィクションを書き、大宅ノンフィクション賞をもらい、自分の足跡を残した。彼女は旅先のパワーを取り入れて、自身を壊し、大きくなった。

多くの人はそうではない。曖昧な自分を受け入れることを覚え、日常生活に溶け込んでいく。たまに本書のような本を読む。溶け切れず、沈殿してしまった気持ちだが、そうして、わさわさと震える。(真中智子)

ピースボート 105 日間の旅の中に、安息日というのが 3～4 回ある。その日一日は、いろいろな企画はすべてなしで、ゆったり過ごそうという日である。3月9日、スエズ運河通過の日は安息日だった。

その日は、自主企画など入れないで、船旅でしか経験できないスエズ運河の航行だけを、デッキに出て楽しもうというわけだ。屋上デッキではビアガーデン、前方デッキには特設バーがオープンしたが、あいにくの空模様で、薄ら寒く時々雨も降り、ビールを飲む気分にはならなかった。

スエズ運河はフランス人のレセップスによって建設された、というのは小学校か中学校の社会科で習った。それ以上のことは何も知らない。今回もまた 2 日前からの俄か勉強だ。運河は川ではなく、水利のために人工的に造られた水路である。そこまでは納得。

歴史的には、地中海と紅海をつなぐ試みは大昔からあったという。紀元前 1800 年代に、ナイル川と現在のスエズとを結ぶ東西に走る運河が掘られた。これは、運河とナイル川を通して紅海と地中海を結ぶもので、8 世紀まで 3000 年近くも使われていたのだそう。大航海時代には、ヨーロッパ人は香辛料や黄金を求めて東方へ向かった。アフリカ大陸南端の喜望峯回りのルートが、ヨーロッパとアジアを結ぶ貿易路として 400 年近く続いた。ヨーロッパ人にとっては、アジアへの最短距離を可能にする地中海と紅海を結ぶ運河の建設は長年の夢だったろう。

ナポレオンがエジプト遠征に同行させた学術調査団のひとり、ル・ペールの書いた「二つの海をつなぐ運河」と題する書物には、地中海と紅海の水位差が 10m に及ぶため運河の建設は無理だと記してあったという。当時(19 世紀初頭)は、技術や経費の関係で、水位を人為的に調節するための閘門をつくるのは難しかったようだ。ところが、地中海と紅海の実際の水位差は 1～2m だった。それに気づいたレセップスは、運河建設の許可書を取り着手することになるが、工事中には 12 万人もの労働者が亡くなり、10 年の歳月をかけて、スエズ運河は 1869 年にやっと完成にこぎつけた。そこまで犠牲を払って建設された運河だったが、エジプト政府の困窮によりわずか 6 年で英国に売却され、その後数十年間にわたって英国は運河を所有し、そこから莫大な利益を得た。

クーデターを経て大統領に就任したナセルは、1956 年「スエズ運河の国有化」を宣言、これに反対して、英仏イスラエルが派兵し第 2 次中東戦争勃発、米国の介入。結果的にはエジプトは運河の国有化に成功したが、スエズ運河はその後もつねに緊迫した状況と隣り合わせにおかれてきた。

紅海側のスエズ運河の入口にスエズというまちがある。ピー

スポーツはその近くに前日の夜から沖泊まりして待機した。そしてコンボイという船団を組んで、翌朝 8 時頃からスエズ運河に入り地中海に向かった。15～16 隻の船の 8 番目にピースボートはつけている。約 170km のスエズ運河を、平均時速 7 ノット(13km)というゆっくりした速度で船団は進む。左舷のアフリカ大陸側は、緑が多く人家や畑もあって、農作業をしている人の姿もある。どんな作物をつくっているのだろうか。運河に沿って鉄道線路も敷かれていて、列車が走っているのも見られた。右舷のシナイ半島側は、荒涼とした砂漠地帯が延々と続き、人影も建物も肉眼では見られず、左舷側とは対照的な風景だ。しばらく同じような景色が続くときには、キャビンに

戻って休憩する。要所要所では船内放送が入るのでそのときにまたデッキに出る。

事前に話には聞いていたが、6 階のレセプション脇で“アラブの商人”達が店を開いて商売を始めた。彼らはポートスエズからパイロットと一緒に、その関係者として乗り込んできたのだ。床にエジプトのお土産品をずらりと並べたところに、結構な人だかりができています。値段の交渉など見ているだけで楽しい。ついつい私も T シャツと菜と便箋を買ってしまった。2 割くらいは値切ったと満足していたが、その晚上陸したポートサイドの土産物屋ではその半額くらいで売っていた。さすが“アラブの商人”である。

しばらくキャビンで休んでいると、スエズ運河で一番大きなグレートビター湖に入ったとの放送

があった。デッキに出てみると、運河の幅はぐっと広がり、地中海側から航行してきたコンボイとすれ違うところであった。客船よりも圧倒的にタンカーが多い。左舷のアフリカ大陸側は、リゾート地として開発が進んでいる。建物もたくさん目につく。

午後には、もうひとつの湖のティムサーフ湖を通過。ここまで来れば運河も半分以上過ぎたことになる。運河の壁に 200m 毎に数字がついている。これはポートサイドからの距離を表している。紅海側から進むと、その数がだんだん減っていくので、地中海に近づいているのを実感できる。

夕方、前方はるかに橋が見えてきた。2001 年、日本の ODA を受けて完成したスエズ運河橋だ。正式名称は、El salam Bridge(平和の橋)、シナイ半島とアフリカ大陸をつなぐ全長 300m の巨大な吊り橋だ。スエズ運河には、これまでに何回か橋が架けられたことがあったが、いずれも中東戦争などで破壊され、このスエズ運河橋は 34 年ぶりのこと。この橋をくぐるとポートサイドまでもうひと息。通常 8 時間～12 時間かかるといわれるスエズ運河をなんと 8 時間余りで通過したのだ。予定より 4 時間ほど早い 18:15、ポートサイド入港だった。



アフリカ大陸側の緑が多いリゾートビーチ



シナイ半島側の荒涼とした砂漠地帯

※ 大家好！

北京は今、中央分離帯のバラの花(コウシンバラ)が真っ盛りです。いつもは、土埃にまみれてみすぼらしいですが、今の季節は、色とりどりの花が咲き誇り、葉っぱさえ、緑に輝いて見えます。渋滞もあまり気になりません。

そんな北京の道路を走っているタクシーが大きく変わりました。今までタクシーといえば、赤い車が殆どでしたが、今回は、ツートンカラーのタクシーが随分増えました。ボディの下のほうが黄色で、間に白いところを残しながら、上のほうが茶色、青、赤、水色、緑、エンジ等々、様々な組合せがあります。会社名も「〇〇〇〇出租汽车有限公司」というような長ったらしい名前から「北創」とか「京南開発」とか、長くて4文字程度で見易く、別に、「北京出租」という文字がどの車にも入っています。観察期間が短いので、不確かですが、どうも、同じ色の組合せは同じ会社ようです。日本の個人タクシーが、同じ形の防犯灯を車の上に乗せているのと同じようなものかと思えます。

因みに、空港からのタクシー、今までは、タクシーのナンバーをくれるだけでしたが、今回は、係りの人が、何処へ行くのか一々聞いて控えていました。これで、空港からのタクシーは、より安全になりました。くれぐれも、白タクには乗らないで、正規のタクシー乗り場から、係員の誘導で、利用するようにしましょう。安心出来ますから。(5月26日)

※ 大家好！

最近の北京の天候は荒れ模様です。昨日(31日)は、雷が降ったそうです。突然、雷が鳴って、急激な雨が降ってきました。私は、屋内で雨足の強いのにびっくりしただけですが、降り初めは雷だったそうです。29日にも、雷とわか雨が降りました。北京に来て、まだ10日なのに、夕立のような雨が3回もありました。

「夕立のよう」とはいえ、日中晴れているわけではないです。曇り空で、暑さもそれほどではないのに、夕方、突如、雷が鳴り、激しい雨が降ります。もっとも、降っている時間はあまり長くない、30分ほどですが……。

北京生活の楽しみは、果物です。土曜日には、「今年最後のイチゴ」を食べました。日曜日には、「今年初めてのスイカ」を頂きました。イチゴの値段は、聞き損ねましたが、スイカは、1斤(500グラム)1元でした。買って下さったスイカは、10斤(5キロ)で10元、日本円で、130円程です。包丁を入れると、バシッと割れて、充分熟れて美味でした。売っている人は、北京で採れたと言っていました。まさか、北京の路地栽培で、今頃こんな美味しいスイカができるとは思えません。温室ものだとすれば安すぎるし……、本当に北京産でしょうか。

一昨日、街でスイカが1斤8角というのも見ました。今年のスイカは、例年より安いようです。昨年は、最盛期の値段が、1斤6角位でした。今頃1斤8角だったら、今年最盛期には、いくらになるのでしょうか?買う方には楽しみです。生産者はやりきれないでしょう。

町へ出た折、サクランボを買いました。サクランボは、北京で一番高い果物だそうですが、1斤10元でした。つまり、500グラム130円です。酸味がありますが、その分パンチが効いていて、それでいて充分甘いです。佐藤錦とは比べられませんが、アメリカンチェリーよりは上等です。あとは、マンゴスチンが、1斤5元でした。日本では果物の女王とか言われますが、こちらでは、ダンポール箱にゴロゴロ入れられて並んでいます。平べったい桃も出始めました。これからは桃の季節です。(6月2日)

※ 大家好！

昨日まで、北京の上空では、雷様の会議があったようで、連日、夜になると、頭の上で、ゴロゴロと鳴っていました。3,4日前には昼間も、議論していたようで、音が一日中聞えていました。議論が沸騰すると、水を差さないといけないようで、夕方バケツをひっくり返したような雨が急に降ってきたり、朝からザァ〜と降ったりと、めまぐるしい一週間でした。

今日は、うって替わって、カンカンのお天気で、真夏のような日差しが照り付けましたが、雨で洗われた街は、埃が少なく、快適でした。

ところで今日は、労働人民文化宮へ、友人の絵の展覧会に行きました。故宮の西華門でタクシーを降りて、故宮の外の壁際を、中山公園をお堀の向こう側に見ながら歩いて、会場に着きました。実は、故宮の周りを一周するプランを、先週考えたのですが、その時は、清華大学でのマージャンの誘惑に負けて実現しませんでした。今日、はからずも一部分歩いてみて、全部歩いてみる価値があると思いました。

先週の土曜日、国際経済の博士である孫進先生のお宅へお邪魔しました。上海の不動産投資にかかる税金の話が孫進先生から出ました。その時は、(日本でも、)投機的な不動産取得には、いろいろ規制がかかった、と言う話で終わってしまいましたが上海では、マンションの値段が下がったそうです。(6月12日)

※ 大家好！

昨日、近くの紫竹院公園で、お茶会をしました。と言うと、聞こえはいいのですが、いろいろ手違いがあり、食べるものは、とうもろこしの粉を焼いたものと、味の薄い、ワッフルの硬いもの(想像がつかますか?)で、おまけに、それが昼食の代わりだったので、惨めなものでした。でも、お茶だけはとても素晴らしかったです。

紫竹院は、豪柏から、西直門大街を渡ったところにあります。真ん中に大きな大きな池があって(公園の池と言うのが憚られる大きさです)橋を渡って、湖の中の島(といっても、かなり大きい)に行くと、水の中に張り出すように、お茶室があって、お茶が飲めるのです。ちょうど、水の上でお茶を飲んでいるような感じです。

食べ物の持ち込みもできるので、公園に入る前に食料を調達するつもりでしのが、予定通りにいかず、はじめに話したようなことになりました。場所はゆったりとして、水面を渡る風が気持ちよく、昨日はかなり暑い日でしたが、日中をのんびりと過ごしました。

お茶は、いろいろな種類が用意してあって、値段はかなり高めでした。龍井で、更に名前のついた緑茶が、ポットで75元、お湯が別のポットに1ばい5元で、合計85元でしたが、ゆったりした時間のことを考えると、それだけの価値のあるお茶代でした。外でちゃんと食事をして、その後ここでお茶をすれば、最高でしょう。

公園の中は、緑がいっぱいです。木陰で読書、疲れたら昼寝、ナンテ言うのも好いなアと思います。入園料は2元で、別の一面に、1元払って入る、江南風の庭園もあって、ここも趣があります。土曜日曜は、若い二人連れがいっぱいで、あまりゆっくりはできません。行くなら、ウイークデイに限ります。但し午前中は、老人達が、ダンスをしたり、京劇や歌を歌ったりしています。

地図を見ながら、北京西駅近くの蓮花池公園と、天壇公園の近くの陶然亭公園に行きたいなと思っています。二つとも、玉淵潭公園や紫竹院公園と同じように、湖のある公園です。特に、蓮花池は、蓮の花の時期には、とても綺麗だそうで、その季節には是非行きたいです。(6月16日)

(全文責免)

私が住み込んでいた孤児院には、地域の貧困層を対象とした格安の保育園があった。いろいろな理由できちんとした保育園に行けない子供たちを集めて月曜日から土曜日の午前中に保育サービスを提供するものだ。入学の条件は「貧困であること」だ。日本にして月額300円が学費だ。私は、単純に貧困なのだったら保育園には行かなくてもいいのではないのかと、考えていた。しかし、親たちはなんとか頑張って学費を捻出してくるのだ。なぜならそれは、小学校へ進級するためには幼稚園の卒業証書が必要なのだ。

「親が子に残してあげられるもの」とは、なんでだろうか？ 遺産としての土地やお金。ケニアの親たちは口を揃える。「勉強させてあげること」「教育」だよと。「どうして教育なの？」と私は問う。「教育は奪われることもなければ、消えてしまうこともない。その子の血となり肉となってくれるから」と答える。そして「自分で生きていく手段を見に付け、いろいろな可能性を与えてあげたい」と続ける。かつて、イギリスの白人入植者に土地を奪われた経験をもつ彼らは、形あるものよりも形の無い知恵や知識を重要視しているような感がある。

そうして子供たちは、幼稚園に毎日通ってくるが、子供たちを取り巻く環境は決して勉強に適しているとは言えない。まず朝ごはんを食べてくる子が少ない。10時おやつとしてウジというおかゆみたいなものを出すのだが、これが朝昼ごはんのかわりとなっている子が多い。しかも近所から通ってくる子は少なく、大半は5km以上を1時間から2時間かけて空腹のまま歩いてくるのだ。30人の子供に対して先生は一人だ。短い鉛筆10本くらいを交代で使い、ノートがないときは土の上を書いて覚えてしまう。服は肌が見えてしまうほど破けている子もいる。かばんがある子は少なく、スーパーの袋を代わりにしている。朝はみんなでお祈りをして、「今日も自分の上に朝がやってきてくれたことを感謝」するのだ。小さな手を合わせて、目をつぶってみんなで祈るのだ。私はたまに目を開けてそんなみんなの祈る姿を眺めることがあった。30人の小さな子供たちは必死に目を閉じて「神様、美しい朝をありがとうございます」と真剣に祈っているのだ。

自分の身を嘆く子供はいない。一生懸命歩いてきて、みんなでお祈りをして、学び、遊び、毎日を生きているのだ。お手伝いをしなくていい保育園という夢のような時間を過ごしているかのようにいきいきしている。私という外国人にさえ、はじめから歩み寄り、微笑を向けてくれる。わがままで言うことを聞かない、泣いてばかりいる子供に遭遇することはついになかった。みんな「子供大人」なのだ。

生きていくことの厳しさを知る親、先生は子供に厳し



孤児院の子どもたちと



お葬式で棺を埋めたあとでの記念撮影

い。勉強よりも前に生きていくルールを教え込むのだ。先生であろうが、近所の親であろうが、間違ったことをすると近くの大人に怒られて大きくなる子供たちは、保育園でなかでも大人みたいだ。私も怒ることに抵抗があったのは最初の数日で、その後は他の先生から与えられた木の棒で、遅刻した子供やけんかした子供の手を打ったものだ。大粒の涙を流して、「POLE(=ごめんさい)」と抱きついてくるのだ。

「笑わない子」がいた。フローレンスという女の子で、笑顔が印象的なケニア人の子供のなかで珍しい存在だった。なにか問題を抱えているのだろうか、それとも保育園が退屈なのだろうか、心配しつつ接していた。たまに2人で話すことがあるたびに、「家はどうか？」「勉強は楽しい？」「友達がたくさんいるの？」など言葉をかけても、全く笑顔を見せてくれることはなかった。4、5ヵ月たった頃彼女は休みがちになった。近所のお母さんたちのうわさによると風邪ではないかと、いうことだった。そして一週間もしないうちに「フローレンスが亡くなった」というニュースを耳にした。

その後、彼女は心臓の血液が逆流するという心臓の病気があったことが分かった。感情の変化や運動でも血液が逆流してしまうということなので、感情をださないよう

にしていたと聞いた。家は、お父さんがおらず、お母さんはお酒を売る行商をしているが、アルコール中毒であることも聞いた。棺を作るお金は孤児院が出して、お墓に埋葬した。棺の小ささと、あまりにもあっけない死にがっかりと虚無感を感じた。

アフリカでは死が近くにあると言われることがよくあるが、私にとってはこれがはじめての死だった。その後2年あまりケニアに滞在していたが、知っている人、話したことがある人、親戚、親戚の親戚、いろんな人の訃報を耳にした。特に親しくなくても、袖擦り合う縁で出会った人々の死が身近にあることに改めてアフリカで生きていくことの厳しさを感じる。交通事故、エイズ、病気など死因はどこにでもあるかもしれないが、それに対する対策が貧困によって阻まれてしまう現実。フローレンスのお母さんは、心臓の病気と分かっているながらも打つ手はなかったのだろう。お葬式さえもしてあげられなかったのだ。お葬式の後、お母さんは私たちに「ASANTENI SANA(=ありがとうございます)」と少し笑顔を見せてくれた。

「教育」と「生きる」ということ。教育で得た知識で、生きる力を身につけること。それは、貧困から脱出することと、同じかも知れないと思う。ケニアは新大統領を迎えて、小学校の学費を無料とする政策を採った。今、学校は子供たちであふれている。今まで学校に行けなかったり、途中で退学せざるを得なかった子供たちが学校に通うようになっているのだ。ニュースによると、今までずっと学校に行けなかった84歳のおじいさんも一年生として勉強しているそうだ。

ところで私はある日、近くの小学校を訪問した。目立たないよう横目で狭い教室を覗くと、きらきらとした目で何



日本の子どもたちと

かをつかもうと必死な姿を目にした。学校で勉強することは明るい将来へと続く階段なのだろうか。そうあってほしいと思う。先生の大きな声と十人十色の子供たちの声がいつまでも私の耳に残っている。

時と場所は移って、ケニア人のだんなと共に日本の小学校を訪問したことがある。国際交流の授業にお邪魔した。子供は、どこに行っても相変わらず元気に迎えてくれる。ケニア人の黒い皮膚と髪が珍しいようで、いろんなところを触られているのを横目で見ながら思った。ケニアの子供たちもいつか日本の現代の子供たちのように生活や家の心配を小さな体ですることなく、自分の夢を叶えられる可能性のある世の中になればいいなと、考えていた。そして、あまりにも体や髪を子供たちが触るので先生が子供たちに一喝した。「失礼だからやめなさい。」

彼は言った。「失礼じゃないですよ。どんどん触って下さい。どうせ同じですから」。

【活動報告】 アフリカ料理は美味しい！〈アフリカ・ケニアの健康料理〉

'05年6月19日 麻生市民館料理室



予備講習で、ガスバレイさん夫妻とサモサ作りの実習をするスタッフメンバー。

‘わりい’ 24 回目の料理講座は、アフリカのケニアから2年前に来日し、奥さんの竹田悦子さんとともにアフリカ紹介の活動をしているガスバレイ ミグキルスさんをお願いして、出身国ケニアの家庭料理を指導頂きました。メニュー

は、ケニア風牛肉と野菜のスープ、サモサ2種、カチュンパリと呼ばれるアボカドとトマトの野菜サラダそしてアフリカンミルクティ。

料理講座は、いつも事前にスタッフ一同で予備講習を受けます。自分たちで実際に作って、レシピを作ったり、材料の量を見積もったり、講座当日の手順を考えたりするためです。

予備講習用の材料の量とメニューを知らせて頂きました。メニューはともかくも、調味料は塩、スパイスも唐辛子、生姜、ニンニクと、ごく当たり前の物ばかり。おまけにキャベツやニンジン、

トマトなどは思わず声を上げたくなる量の多さ！予備講習を受けるまでは、どんな料理か少し心配でした。

アフリカでは畑から取ってきたばかりの新鮮な野菜をたっぷり使い、野菜の風味を生かして調理すること、ああ、かつては日本でも、野菜や魚は鮮度が命といって、獲れたてのピチピチした魚、太陽を一杯浴びて育った元気な野菜など、素材の味を大切にしていました！折りよく出荷期を迎えた地産の夏野菜を使い、出来上がった料理は予想外の美味しさで感動ものでした！今、健康効果で脚光を浴びているキャベツ、ニンジン、トマトなどの夏野菜をたっぷり頂ける、思いがけない食し方で、改めてアフリカの知恵に脱帽です。

民族の命を育て維持する調理法には、それぞれの民族のさまざまな知恵が詰まっています。本番の講習でも「野菜の新鮮な美味しさが生きている」と参加者全員が実感しました。今回の料理講座を下敷きに各家庭でいろいろに生かして欲しいと思っています。レシピを7月初め、HP更新の折にサイトに掲載します。是非試してみてください。(田井)

「訂親」¹⁾の儀が終わりましたら、最後に「迎親」になります。即ち六礼の「親迎」²⁾です。

現在の「迎親」の日取りは、まだ古くからの慣わしで、陰暦の三日、六日、九日を選ぶのが基本です。というのは、三、六、九という数字は、いずれも陰陽五行説の中で「陽数」で、吉だと思われているからです。

50年代から70年代、国も庶民たちもまだ貧しかったので、「勤儉、節約」が大いに提唱され、結婚式も簡素であるほど進歩的だと思われていました。しかし、ここ二十年来、人々の生活がだんだん豊かになり、昔の風習が再び重んじられるようになりました。

今の若者たちのほとんどは、結婚後、親と別別の生活を始めますので、家の準備、結婚披露宴、また女性側へ色々な金品を贈ったりで、沢山のお金を必要とします。都市で生活している一人っ子の親ならまだ大丈夫ですが、田舎で、しかも二人以上の男の子を持っていたら、親は大変苦勞をすることになります。

結婚式当日は、いろいろ面白い風習があります。一般に、正午までにお嫁さんを迎えて帰らなければ、縁起が悪いと思われるので、男性側は女性側の家に着くなり、花嫁を連れて花嫁の家から出たいのですが、花嫁側はぐずぐずして、いろいろな障碍を用意し、花婿を困らせる事にします。例えば、玄関をしっかりと閉じて花婿さんに入らせないようにしたり、花嫁さんの靴を隠したり、謎々を出したり等々です。花嫁側を満足させ順調に花嫁を連れ出すのは、本当に花婿さんの知恵が要るのです。

昔は「花轎(ホアアジアオ)」「籠」を使って花嫁さんを迎えに行きました。が、今の都市では華やかに飾った車を連ねて迎えに行きます。そんな訳で日取りのいい日、街では綺麗な花で飾られた、同色の車の列がよく見かけられます。皆さんも中国での独特な光景をご覧になったことがありませんか。

結婚式当日、殆どの花嫁は家を出るときに泣きます。古くからの習慣で「哭嫁」といいますが、娘として育ててくれた両親と馴染みの家を離れる悲しみや、新生活への不安などの複雑

な思いを訴える慣わしだと思います。

嫁入り道具は生活用品など色々ありますが、生肉を入れたりすることもあります。娘を嫁がせるのは親として自分の体の肉が取られるようだという気持ちを表すのです。

花嫁を迎えた帰り道は迎えに行く時の道を使ってはいけません。同じ道を帰ることは「回頭路」と言われ、婚姻が元の道に戻ることは望ましいことではないので、どんなに遠回りでも同じ路を行かないのです。

いよいよ花嫁が姑が待つ家に着きました。まずは花嫁をもてなす食事を花嫁さんに食べさせます。それは半熟のうどんや、半生のギョウザなどです。花嫁がそれを食べていると、花婿側の人は必ず「生不生？」と訊きます。「子供を生むか生まないか？」の意味です。

勿論、花婿側は「生(生む)」と言う答えを期待しているのですが、若い花嫁で、その由来を知らず、姑の食事が不味いとは言いにくいので、美味しくなくても「不生(いいえ、生ではない)」と答えたら、皆は大笑いします。また新婚夫婦のベッドにもたくさんクルミや落花生、棗などが撒かれます。早く沢山の子供を生んでくれと言うような望みです。

「鬧洞房(新婚部屋を騒がす)」という言葉は中国人なら、誰でも分かります。結婚当夜、新婚夫婦の部屋で花嫁と花婿の二人を皆が囲み、様々な難題を出してはその答えを楽しみ、大騒ぎをするひとときです。

「洞房花燭夜、金榜提名時」(新婚の夜と科挙に合格した時は人生の二つの喜び)と言う古い言葉がありますが、人生最大の二つの喜びの一つをこの日に迎えるのです。(終)

注1：日本でいう結納の儀にあたる。

注2：結婚式当日、花婿が花嫁を迎えに行く

何媛媛：本名、何向真。

山西省出身。山西大学で日本語及び日本文学を専攻し、卒業。2002年来日して以来、地域の国際交流活動に力を入れ、古筆と中国語を教えています。町田市能ヶ谷町在住。

*HPのアドレスが変わりました。中国琴の演奏をお楽しみいただけます。

Email:kakoushinjp@yahoo.co.jp
http://www.cn-jp.org/

《'わんりい'掲示板》

アジア・フェスタ in WAKO 2005

～和光大学にはこんなアジアもあったのだ!～

▶7月8日(金) 11:00～19:00

【展示】11:00～17:00 G棟 1F

- アジアテーマ展：アジア各地のお守りコレクション等
 - 写真：スリランカ津波被災地の写真など
 - 映像：フィリピン/インドネシアのフィールドワーク・ムービー
- 【アジアの井戸端会議前夜祭】17:00～19:00 G棟 異文化交流室

▶7月9日(土) 11:00～19:00

【パフォーマンス】11:00～13:30 ABC会議室

インド・ラダック地方より来日歌手＝ラダキ・プンショックさんのライブ/民族楽器コンサート/民族舞踊等

【アジア井戸端会議本祭】17:00～19:00 ABC会議室

各国出店食文化出展!アジアをつまみ、アジアを飲み、日本人としてアジア人として、アジアを語ろう! (申込み不要)

問合せ：090-2237-1169 (専任講師：ハンバン)

E-mail：tenku@nyc.odn.ne.jp (岡本)

和光大学：195-8585 町田市金井町2160/小田急線鶴川駅徒歩15分
http://www.wako.ac.jp/index.html

【茶館銀芽】▶中国茶を飲みながら中国ライブを楽しむ

7月の開館日：7/29(金)～31(日)12:00～20:00(最終日18:00) 7月のイベント◆中国茶講座◆ゲストライブ：7/31日13:30～劉純実(魅惑のテノールによる中国の歌)◆展示：「安西東作中国スケッチ紀行2」/山王オーデリアムJR大森駅徒歩8分
●詳細問合せ：ラサ企画 Tel.03-5748-3040
E-mail：lasanon@db3.so-net.ne.jp

【スリランカ・パティック展】▶個性的なスリランカのパティック

山50点を展示 9/5(月)～11(日)10:00(初日13:00)～18:00(最終日16:00)/ばるるギャラリー(ばるるプラザ町田6F、町田東急ハングス隣接) ●主催/問合せ：日本スリランカ文化交流協会(Tel.042-735-9583)

【夏です!美味しいベトナム料理を作って食べよう!】

ベトナムからの留学生、タン・クオックフォンさんと一緒にベトナム料理を味わいましょう!タンちゃんの、生春巻きは抜群の美味しさです!!

8月21日(日) 10:00～14:00 於：まちだ中央公民館調理室(町田市原町6-8-1 町田センタービル 6F JR横浜線・町田駅下車3分小田急線町田駅南口5分) ●参加費実費(2000円前後)参加は'わんりい'会員と関係者のみ 先着20名(申込み8/15まで但し、定員になり次第締め切り) 問合せ：042-734-5100(わんりい)

◆8月は'わんりい'の発行はありません。皆様の楽しい夏をお祈りしています。